

親鸞さまの

【本文】

へんじしつぼう くだん  
片地七宝の宮殿に

ごひやくさい  
五百歳までいはずして

かぐ  
みずから過咎をなさしめて

やく  
もろもろの厄をうくるなり

【意識】

極楽浄土から外れた片隅の地にある無限の宝石に飾られた宮殿の中にあつて、

五百年出ることが出来ない。その結果を招いたのは、

人の自己中心に終止した人生(阿弥陀様中心ではなく)によるものです。

このために極楽浄土に往生すること、その極楽から後の人を導くことも出来ないのです。

【私の味わい】

最後の句の「厄」には、親鸞聖人が左訓さくくんと言われる追記をお書きになっています。

曰く「もろく あやうきなり」と記されていて、その「厄」の語をどういう意味で用いられているかを後の人に向けて丁寧にお示し下さっているのです。その意味は、「不安で不安定な状態」ということです。

これはつまり、一般的にいうところの厄災、不幸な出来事が起きる、罰が当たるという意味ではないということです。阿弥陀様を抛り所にした人生でなくとも、財産を失ったり、病気になったり、命を失ったりはしません。そもそも仏様は、そういった懲罰的な悪意があるお方ではないのです。あくまで「南無阿弥陀仏」、つまりこの阿弥陀仏を抛り所となさい、と尽きせぬお慈悲で人を包むばかりです。この私が、私達が法話を聞き続け、お念仏を称となえ続ける道にご誘引なさるばかりです。

人は、「南無阿弥陀仏」のお心を聞き至らなくても、お念仏の意味を知らなくても生きてはいけるでしょう。ただ、衣食住足りて、健康であったとしてもいずれ病み、老いて、死んでいく現実は変わりません。今日があるように、明日もある。人はそう期待するし、当然のようにも思います。しかし死は、あなたに明日がないのです、という突然の通告です。その時に、自分が死んだら、その翌日はどうなるのか、という考えを持つことはないのでしょうか。何十年積み重ねた習性を止められるのでしょうか。生きていることは、実は「不安で不安定な状態」にあることに気づき、法話聴聞、お念仏致しましょう。  
(悠水)